

【弔辞大全】

レクイエム57

開高 健——編

ひとりの友が
街に夢を残して去った
作家たちの
作家たちへの鎮魂歌



青銅社版

「弔辞大全」

レクイエム

開高健・編

青網社

弔辞大全 レクイエム 57

昭和五十七年十二月十日 第一刷発行
昭和五十八年三月十日 第三刷発行

定価 一三〇〇円

編者 開 高 健

発行者 葛 西 良 員

発行者 株式会社 青銅社

〒一―二東京都文京区千石三丁目五番二―号
電話(九四四)二六二八 振替東京一―七六七九

印刷 東洋社印刷
製本 大口製本

万一乱丁落丁がありましたらお取替致します

目 次

北村透谷 明治27年没 亡友反古帖

島崎藤村 9

正岡子規 明治35年没 悼子規君

安藤椽面坊 12

尾崎紅葉 明治36年没 紅葉先生弔詞

泉鏡花 14

川上眉山 明治41年没 嗚呼眉山君

石橋思案 16

国木田独步 明治41年没 弔 辞

田山花袋 19

石川啄木 明治45年没 石川啄木君と僕

若山牧水 21

夏目漱石 大正5年没 葬儀記

芥川龍之介 32

島村抱月 大正7年没 忘れ難きことども

松井須磨子 39

森鷗外 大正11年没 鷗外先生

永井荷風 42

芥川龍之介 昭和2年没 弔 辞

菊池寛 45

徳富蘆花 昭和2年没 一日如夢の記

徳富蘇峰 46

葛西善蔵 昭和3年没 弔 辞

谷崎精二 54

若山牧水 昭和3年没 弔詞

北原白秋 56

小林多喜二 昭和8年没 同志小林多喜二追悼之辭

日本プロレタリア文化連盟 58

宮沢賢治 昭和8年没 弔辭

儀府成一 61

与謝野寛 昭和10年没 与謝野寛先生弔詞

佐藤春夫 64

牧野信一 昭和11年没 牧野さんの祭典によせて

坂口安吾 66

中原中也 昭和12年没 死んだ中原

小林秀雄 70

岡本かの子 昭和14年没 妻を懷ふ

岡本一平 73

立原道造 昭和14年没 立原道造を哭す

室生犀星 81

萩原朔太郎 昭和17年没 師よ 萩原朔太郎

三好達治 87

与謝野晶子 昭和17年没 与謝野夫人晶子先生を弔ふ

高村光太郎 91

北原白秋 昭和17年没 白秋さん、貴方は生きてゐる

福士幸次郎 93

島崎藤村 昭和18年没 弔辭

徳富蘇峰 96

徳田秋声 昭和18年没 弔 辞

正宗白鳥 98

織田作之助 昭和22年没 織田作之助君を偲ぶ

杉山平一 100

幸田露伴 昭和22年没 露伴翁の永眠に対して

山本有三 105

横光利一 昭和22年没 弔 辞

川端康成 110

太宰治 昭和23年没 山水蒙（中凶）

今官一 114

田中英光 昭和24年没 弔 辞

豊島与志雄 119

宮本百合子 昭和26年没 弔 辞

細川嘉六 121

原民喜 昭和26年没 弔 詞

埴谷雄高 123

前田夕暮 昭和26年没 弔 辞

折口信夫 126

林芙美子 昭和26年没 林芙美子さんを悼む

平林たい子 129

斎藤茂吉 昭和28年没 弔 辞

土屋文明 135

堀辰雄 昭和28年没 悼 詞

室生犀星 137

岸田 国士 昭和29年没 弔 辞

三好達治 139

坂口 安吾 昭和30年没 安吾のゐる風景

石川 淳 143

高村 光太郎 昭和31年没 弔 辞

戸来九左衛門 160

室生 犀星 昭和37年没 今は亡しわが犀星

佐藤春夫 163

佐藤 春夫 昭和39年没 弔 詞

川端康成 167

谷崎 潤一郎 昭和40年没 弔 辞

舟橋聖一 169

壺 井 栄 昭和42年没 弔 辞

佐多稲子 172

伊 藤 整 昭和44年没 伊藤整弔辞

瀬沼茂樹 175

三島 由紀夫 昭和45年没 三島由紀夫氏の死ののちに

武田泰淳 179

高橋 和巳 昭和46年没 とむらいのことば

小田 実 189

志賀直哉 昭和46年没 志賀直哉

武者小路実篤 192

川端 康成 昭和47年没 川端さんの死に就いて

丹羽文雄 195

椎名麟三 昭和48年没 弔 辞

大江健三郎 200

金子光晴 昭和50年没 弔 詞

草野心平 203

檀一雄 昭和51年没 弔 辞

尾崎一雄 205

舟橋聖一 昭和51年没 弔 辞拾遺

丹羽文雄 209

武者小路実篤 昭和51年没 弔 辞

中川一政 216

武田泰淳 昭和51年没 誄 詞

山本健吉 221

平野謙 昭和53年没 弔 辞

埴谷雄高 225

福永武彦 昭和54年没 さらば、青春の友よ

堀田善衛 228

西脇順三郎 昭和57年没 誄 詞

山本健吉 232

【兩辭大全】

レクイエム 57

北村透谷

明治二七年五月一六日没 享年二五 明治の中頃、個人の内面の自由を求める近代的思想に立つて詩を書き、また『厭世詩家と女性』などの評論や反戦運動に活躍した北村透谷は、先覚者ゆえの苦悩を背負い、理想と現実の間にひきさかれて自殺した。島崎藤村らと新しい文芸の雑誌「文学界」を創刊して一年余りのちのことである。理想に殉じて生活に破れた透谷の死。それは日本の文学者の自殺の歴史の第一ページを開いただけでなく、のちの文芸の流れにも大きな影を落とすことになった。透谷の影響下に出発し、近代ロマン主義の抒情詩を達成した藤村は、やがて生活の現実についた自然主義小説の道を選んだ。

亡友反古帖

島崎藤村

北村透谷子の書き捨てたる反古はぐにして、積んで其の書斎うづたかに堆たかき中より、抜き集めて吾が書架しょだの一隅に保存し置きたるものあり、頃日このころかの反古を棚の上より取りおろし、塵ほこりをはたきて彼是かれこれと読み行くに、亡友彷彿として吾が眼前にあるが如く、転うた懷旧の情に堪えず。

飄遊を好める面白き男として彼を知れるものもあるべし。俠骨を愛し慈善を好みたる志士として彼を知れるものもあるべし。外面極めて飄逸にして内部極めて沈鬱なる詩人として彼を知れるものもあるべし。自然の研究者として、靈活なる評家として彼を知れるものもあるべし。彼は常に吾に告げて曰く僕には友少なし、また強ひて友を求めんともせずと。然れども彼は勉こめて交遊

を怠らざりければ、彼を知れる知名の君子も少なからざるべし。吾は彼と相知り相慕ひてより極めて深情ある親友として忘るゝこと能はざるなり。

歲月江水の如し。あゝ吾は旧友の再び見るべからざるを思ふごとに、歲月の人の希望を相容れざることを歎ぜずんばあらず。惜しいかな芳蘭夭折して既に二春秋、幽明境を異にして再び相語るに能はずと雖も、子よ、子よ、幽界の事は子が生前に於て想像せしが如きものありや、否や。いかに冷たき泥土に覆はるゝとも、いかに重苦しき石碑を戴くとも、いかに一点の日光だも通ぜざる暗孔に押込めらるゝとも、子は今や何の傷むところ何の羈絆を苦しむところなきか。春くれば桜の花の子が墓の上に散り、秋は秋草乱れ茂りて墓畔に露の玉の如きものありとも、子は今や何の情を動かすところなきか。今一度人間世界に帰り来つて旧友と相見ることを欲せざるや。嗚呼子よ、子が歩みつゝある「死」とは夫れ詩人の歌ふ眠りの如きものか、眠りならば楽しき眠りにてもあれかし。(中略)

吾が知りてより透谷子四度居を転ぜり。高輪の旧寺に寓せし時、庭前草花あり、花園に隣りて畑あり、室のうしろは老杉鬱蒼古墳墓々としてかの『鬼心非鬼心』を草せしは爰なり。高輪を去つて芝公園紅葉館の裏手なる小堂に移りしや、絃歌手に取るが如く聞え、古木堂を擁し、蚊多く、室暗く、猫を捨てられて心を傷めし暁も度々なりなどいふ話もあり、老鼠堂の庵に近くして永機宗匠をやりこめたる話も聞けり。こゝも住みうくてや麻布に転じ、山羊を買ひて面白からず、霞町に転じてまた面白からず、後相州国府津の旧寺の一室を借受けてこゝに一家を楽しみ、波の音

に蝶の夢を破られて再び都に上り、芝公園の旧堂に歸りて病んで再び起^たたざりき。嗚呼想ひ来れば吾が眼前に浮び出で、吾をしてこの文を草せしむと雖も、文に情^{じやう}なく詞^{ことば}に力なく不肖徒^{いたづ}らに彼をして幽界のかなたに一微笑を催さしむるに過ぎざるのみ。

〔女学雑誌〕明治二八・一二

正岡子規

明治三五年九月一九日没 享年三四 理想や空想を書くことを退け、客観的な写真こそが本道であるとして、俳句、短歌、そして文章の革新をなした正岡子規。句集『寒山落木』歌集『竹の里歌』歌論書『歌よみに与ふる書』随筆『墨汁一滴』『病牀六尺』等の実作と啓蒙的な理論は、後継者にうけつがれ、それぞれのジャンルを制覇する潮流となる。

その子規の文学的な活動期の大半は、脊椎カリエスによってほとんど病牀に臥したままであった。「糸瓜咲て疲のつまりし仏かな」などの絶筆によって、命日は糸瓜忌と呼ばれる。

安藤橡面坊は、大阪毎日に務め、俳壇を担当した。遺句集『深山柴』がある。

悼子規君

安藤橡面坊

噫子規君逝けり、君病褥にあること殆ど八年、その死せんとすること数次なり、然るにその呻吟苦悶の裡、あらゆる痛苦と闘ふに俳句を以てし、短歌を以てし、文章を以てせり、而してその克く俳句をして一新生面を開き、上芭蕉蕪村を凌いで、更に明治文学史上の一部を飾るに至れり、若し天これに仮すに年を以てし、仮ひ病に在るも尚昔日の如く甚しからざれば、終に他の短歌、文章亦この俳句の如く、大いに一新地区の開拓者として成効せんこと、蓋し期すべかりしならん、更に君にして初めより病なからんか、その成効するところ豈に啻に俳句、短歌、文章等一文学而已にして而して止まんや、然るに天此の人にして斯の病を下し、又一日も寧時なく、終に之に継

ぐに死を以てし、万事茲に休みぬるに至らしむ、噫哀哉。

翻つてこれと思ふに今日文明の昭代、文学に芸術にその一家を為せるもの、何ぞ限らん、されど君が如く病褥中尚孜々として怠らず、健忍精勵、病その身にあるを知らざるものゝ如く、又その死なるものゝあるを知らざるが如くにして、只管その学ぶ所に忠実なるもの果して幾人かある、宜なるかなその博く天下の畏敬を請け、その流派の及ぶところ滔々乎として弘く且つ大なるものあるや。

然れどもこの畏敬すべき明治の偉人今や亡し、その景慕せる高風望んで又見るを得ざるなり、彼の蒼なるものは天、痛悼曷ぞ耐へんや、噫哀哉。

滴りつくす系瓜の水や君逝けり

〔大阪毎日新聞〕明治三五・九・二四

尾崎紅葉

明治三十六年一〇月三〇日没 享年三六 硯友社の総帥として活躍、近代的な文章の完成に力を尽くし、『三人妻』『多情多恨』などの作品によって明治文壇に大きな足跡を残す尾崎紅葉は、晩年胃病に悩まされ続けた。胃癌という診断をうけ、養生につとめたが、心血を注いだ大作『金色夜叉』の完成を見ないまま、没した。紅葉は多数の小説家を育成し、『牛門』と呼ばれる門下のうちでも泉鏡花、小栗風葉、徳田秋声、柳川春葉は「四天王」と称された。

鏡花は一九歳で尾崎家玄關番となり、三年半ほど同居して小説修業にはげんだ。神楽坂の芸者を身受けして同棲、病床の紅葉から叱責されたが、紅葉没後妻としてむかえている。

紅葉先生弔詞

泉 鏡花

門生十八人、こゝに、涙の袂を列ねて、先生に別れ奉らむとす、誠に、永き御別れにもありけるかな、乞ひて留り給はむ御身ならば、御袖に、取縋り、御裾に、取付き申しても、今一度御顔を拝み奉らむものを、御命に代る事の慟ふべくは、誰も誰も勇みて代り奉らむとは願へるものを、昨日は神無月の雨寒く、今日は紅葉の名に見れど、悲しいかな、吾等が先生は逝きて歸り給はざるなり、御恩の一端だも酬い奉る事はせで、御死骸を御墓に送り奉りつゝ、今は何事も申すべき辞なし、唯人の世に三十七年の短き御命は、やがて千載に朽ちぬ御名を呼びて、土の下なる御臥床に安らに眠り給はむ事こそ願へ、あはれ七度も、はた百度千度も文の林に色を添ふる紅葉先生